



# 風景の句読点

Punctuation of Scene 第14回

末続海岸から

## 末続

### この地で生き続けることを諦めない人々の集落 (福島県いわき市)

#### 福島県で最も海に近い駅

いわき市の最北に位置する常磐線末続駅のホームに降り立つと、海が見える。駅は丘の上にあり、海を見下ろす形だ。ホームの中や周りには色とりどりの花が植えられ、鉢植えは等間隔に置かれ、手入れが行き届いていることを感じさせる。

末続駅の前身は戦時中、緊急時に備えた信号所であった。戦後、人々は復興の足がかりとして駅の開業を求めたが、収益が見込めない駅であることから、駅舎建設のための労力は地元が負担する形となった。人々は自ら駅舎造りに参加し、労力は延べ3,000人を超えた。こうして末続駅は、昭和22(1947)年6月に開業を迎えた。

「風景の句読点」は、私たちの心に句読点を打ち、思わず足を止めたくくなるような素晴らしい風景について、その成り立ちや魅力の源泉を紹介するコーナーです。

株式会社片平新日本技研/道路部  
田中 知実 TANAKA Tomomi (会誌編集専門委員)



末続駅のホーム

### 新第三紀の海岸地形

いわき市は、阿武隈山地東縁部の浜通り地方に位置し、およそ海拔200m以下の丘陵性台地と、段丘および平野部から構成されている。

市北部の末続海岸は、今からおよそ2千万年前の新第三紀の地層で構成されており、波と風の力で侵食された海食崖など独特な海岸地形が続いているが、約2万年前の

最終氷河期においては、浜通りの海岸は現在とはまったく異なる、幅10kmにおよぶ広大な海岸平野を形成していた。

### 防風林「道山林」

末続海岸からは森のような防風林が見られる。末続は海付農村であり、小高い山々を有する地形で、海から吹く塩分を含んだ特有の風で稲や農作物が被害を受け、農民を苦しめた。いわき地方の林業は、元和8(1622)年に入封した内藤政長によって拡大され、植林数は毎年10万本にも及んだといわれる。田畑を守るために植林を行った政長の功績をたたえ、この林は彼の戒名を冠し「道山林」と呼ばれる。

東日本大震災で大津波が押し寄せた際は、道山林が波の威力を弱め、林の背後は津波の被害が軽減されたという。

### 東日本大震災の影響

末続は、津波だけでなく原発事故による影響も受けた。避難指示は1ヶ月ほどで解除されたが、目に見えない放射線問題に直面した。末続では古来農業が盛んで、米作りが習俗に深く根ざしている。地面に降り落ちた放射性物質は田や畑の土壌から農作物にも移行する。この問題解決のため、人々は放射線を測定し可視化することから始めた。

地区の予算からの借入れを原資に、住民が協力して放射線量の計測プロジェクトを進め、末続の空間と土壌の線量マップを作成した。そして外部の専門家の知恵を借り、その数値が深刻ではないという認識を共有した。末続の人々は自ら道を切り開き判断していくことで、生活を取り戻していった。

生活を取り戻していった。

### 生活を続けていくということ

末続は観光地ではない。だからこそ人々は自らの知恵と力で生活を続けようとするのだと思う。末続海岸の防潮堤の上に立つと、海だけではなく松林と家と畑が見える。自然と共に生活し続ける人々が作り上げたこの風景に、穏やかでありながら力強さを感じた。



丘から見える景色

#### <参考資料>

- 1) 『いわき市史 第2巻』いわき市史編さん委員会編、いわき市、1975.
- 2) 『いわき海岸紀行』柳沢一郎・草野日出雄共著、はましん企画、1980.8.
- 3) 『四倉の歴史と伝説：いわき北部史』本多徳次、四倉郷土史資料集成刊行会、1986.6.
- 4) 『末続アトラス2011-2020』原発から27km-狭間の地域が暮らしを取りもどす闘いの記録』福島のエース編著、福島のエース、2022.10.

写真：筆者